

元禄時代小説第一巻「本朝二十不孝」ぬきほ（言文一致訳）

井原西鶴

宮本百合子訳

青空文庫

跡のはげたる娼入長持

娼入、娼取なんかの時に小石をぶつけるのはずいぶんらばうな事である。どうしたわけでこんな事をするかと云うと是はりんきの始めである。人がよい事があるとわきから腹を立てたりするのも世の中の人心で無理もない。自分の子でさえ親の心の通りならないで不幸者となり女の子が年頃になって人の家に行き其の夫に親しくして親里を忘れる。こんな風儀はどこの国に行つても変つた事はない。

加賀の国の城下本町筋に絹問屋左近右衛門と云うしにせあきんどがあつた。其の身はかたく暮して身代にも不足なく子供は二人あつたけれ共そうぞくの子は亀丸と云つて十一になり姉は小鶴と云つて十四であるがみめ形すぐれて國中ひょうばんのきりようよしであつた。不斷も加賀染の模様のいいのなんか着せていろいろ身ぎれいにしてやるので誰云うともなく美人問屋キヌと云つてその娘を見ようと前に立つ人はたえた事がない、丁度年頃なのであつちこつちからのぞみに母親もこの返事に迷惑して申しのべし、「手前よろしければかねて手道具は高蒔絵の美をつくし衣装なんかも表むきは御法度を守つても内証で鹿子なん

かをいろいろととのえ京都から女之行儀をしつける女をよびよせて万事おとなしく上品に身ぶるまいをさせて居たので今ときめいて居らっしゃる誰さんのおよめさんだっておそらくこんなよいおよめはないでしょうからね」と母親の鼻の高いことと云ったら白山の天狗殿もコレはコレはと頸をふって逃げ出してしまうだろう。ほんとに娘をもつ親の習いで、化物ばなしの話の本の中にある赤坊の頭をかじって居るような顔をした娘でも花見だの紅葉見なんかのまつさきに立ててつきうすの歩くような後から黒骨の扇であおぎながら行くのは可愛いものを通りすぎておかしいほどだ。それなのに母親の目から見れば昔の伊勢小町紫の抱帯、前から見ても後から見ても此の上ない様子だと思ってホクホク物で居るのも可笑しい。これでさえもこれほどなんだから左近右衛門の娘に衣類敷金までつけて人のほしがるのも尤である。此の娘は智えらびの条件には、男がよくて姑がなくて同じ宗の法華で綺麗な商ばいの家へ行きたいと云って居る。千軒もあるのぞみ手を見定め聞定めた上でえりにえりにえらんだ呉服屋にやったので世間の人々は「両方とも身代も同じほどだし馬は馬づれと云う通り絹屋と呉服屋ほんとうにいいお家ですネー」とうわさをして居たら、半年もたたない中に此の娘は男を嫌い始めて度々里の家にかえるので馴染もうすくなり、そんな風ではととうとう三条半を書いてやる。

まもなく後に菊酒屋と云う有名な酒屋にやった所がここも秋口から物やかましいといやがられたので又、ここも縁がないのだからしかたがないと云って呼びかえした。其後又、今度は貸金までして仕度をして何にも商ばいをしない家にやるとここも人手が少なくてものがたいのでいやがつて名残をおしがる男を見すて恥も外聞もかまわないで家にかえると親の因果でそれなりにもしておけないので三所も四所も出て長持のはげたのを昔の新らしい時のようにぬりなおして木薬屋にやると男にこれと云うきずもなく身上も云い分がないんでやたらに出る事も出来ないで化病を起して癲癇を出して目をむき出し口から沫をふき手足をふるわせたんでこれを見てはあんまりいい氣持もしないんで家にかえすところんで親には先の男にはそりやあ、いやな病氣があるんですよといいかげんなさたに、この報はきつとあるだろう。もうまもなく振袖も見つともなくなったのでわきをふさいでからも二三度縁組みして十四の時から嫁に行き初めて二十五まで十八所出て来たり出されたりしたんで段々人が「女にもあんなあばずれ者があるもんですかネー」と云いひろめられたので後では望み手もなくて年を経てしまった。嫁入のさきぎきで子供を四人も生んだけれ共みんな女なんので出る段につれて来てその子達も親のやつかいになつて育て居たけれどもたえまなくわずらうので薬代で世を渡るいしやでさえもあいそをつか

して見に来ないのでとうとう死ぬにまかせる外はない。弟の亀丸も女房をもらつてもよい時だけ共姉がそんな女なので云い込む人もなくて立つて居た所が亀丸はとうとう病氣になつて二十三で死んでしまつた。二人の親も世間に見せるかおがないと云つて家の中に許り入つて居たけれ共とうとう悔死、さぞ口惜しい事だつたらうと人々は云つて居た。其の後は家に一人のこつて居たけれ共夫となるべき人もないので五十余歳まで身代のあらいざらいつかつてしまつたのでしようことなしに親の時からつかわれて居た下男を夫にしてその土地を出て田舎に引き込んでその日暮しに男が犬をつつて居ると自分は髪のおなんかうつて居たけれどもこんなに落ぶれたわけをきいて買う人がないので暮しかね朝の露さえのどを通す事が出来ないでもう今は死ぬ許りになつてしまつた。花の様な美しかった形はもうどこかに行つてしまつた様になつて野原の岩によりかかつてミイラの様になつて死んでしまつた。一体女と云うものは一生たよるべき男は一人ほかないはずなのに其の自分の身持がわるいので出されて又、後夫を求める様になつては女も終である。人と云う人の娘は第一考えなければならぬ事である。一度縁を結んで再び里にかえるのは女の不幸としてこの上ない不幸である。若し夫は縁がなくて死んだあとには尼になるのがほんとうなのに「今時いくら世の中が自分勝手だと云つてもほんとうにさもしい事ですネー」とうそつき

商ばいの仲人屋もこれ丈はほんとうの事を云った。

旅行の暮の僧にて候

雪やこんこん、あられやこんこんと小棲にためて里の小娘は嵐の吹く松の下に集つて脇明から入つて来る風のさむいのもかまわず日のあんまり早く暮れてしまうのをおしんで居ると熊野を参詣した僧が山々の□所を越えてようやくようよう麓のここまで下つて来てこの一群の子供達のそばに来て息も絶え絶えの様な声をして「人の住んで居る所まではまだ遠いのですか」ときく様子は腰や足がとくにちやんと止まつて居られない様にフラフラして気味がわるいので皆んな何とも云わずに家へ逃げかえつてしまった、その中にたつた一人岩根村の勘太夫の娘の小吟と云うのはまだ九つだったけれ共にもしないでおとなしく、「もう少し行らつしやると私の家ですから湯でもさしあげましょう」とその坊さんに力をつけて案内して家にかえると夫婦で立つて来て小吟の志をほめ又、旅人もさぞお困りであつたろうと薪柴をたいていろいろとてなした。法師はくたびれて居てどうもしようがなかつたのをたすけられてこの上もなくよろこび心をおちつけて油単の包をあらためて肩に

かけながら、「私は越前福井の者でござりますが先年二人の親に死に別れてしまったのでこの様な姿になりましたけれ共それがもうよつぽど時はすぎましたけれ共どうしてもなくなつた二親の事が忘られないのでせめて死後供養にもと諸国をめぐり歩くものでございますから又、二度とお目にかかる事はございますまい。えろうお世話になりました」と手を合せておがみ夜ざりの中に出てゆくあとで娘が云うには「一寸一寸、今の坊さんはネ、風呂敷包の中に小判を沢山皮の袋に入れたのをもつて居らっしゃるのを見つけたんですよ、だから、御つれもないんだから誰も知る人もありませんから殺してあの御金をおとりなさいよ」とささやいたので思いがけない悪心が起つたので山刀をさし枕槍をひっさげてその坊さんの跡をおつかけて行く、まだ九つ許りの娘の分際でこんな事を親に進めたのは大悪人である。殊更、熊野の奥の山家に住んで居るんだから、干鯛が木になるものだから、からかさは何になるものかも知らない筈なのに小判と云うものを知って居るのも不思議である。彼の坊さんは草の枯れた広野を分けて衣の裾を高くはしより霜月の十八日の夜の道を宵なので月もなく推量してたどつて行くと脇道から人の足音がかかるくたちどまったかと思うと大男が槍のさやはらつてとびかかるのをびっくりして逃げる時にふりかえつて見ると最前情をかけてくれた亭主である。出家は言葉かけて「私は出家の身でござるから命が

惜しいにはござらぬけれ共何のうらみがあつてこの様な事をなさるのじや。路銀が取りたいのならば命にかえてまでおしませぬじや」と小判百両をありのまんまなげ出せばそれをうけとり「金がかたきになる浮世だワ」と脇腹を刺通すと苦しい声をあげて「汝、此のうらみの一念、この幾倍にもしてかえすだろう、口惜い口惜い」と云う息の段々弱つて沢の所にたおれたのを押えて止をさし死がいを浮藁の下にしずめそうつと家にかえったけれ共世間にはこんな事を知つて居る人は一人もなくその後は家は榮えて沢山の牛も一人で持ち田畠も求めそれ綿の花盛、そら米の秋と思うがままの月日を重ねて小吟も十四になって美しゆう化粧なんかするもんで山里ではそれほどなくつても殊更に目立つて之の女を恋うる人が限ない。自分の姿を自慢して男えらみ許りしてとうとう夫もきめないで身をぞんざいにしていろいろの浮名をたてられる。親達は心配していろいろの意見するけれ共一度でも親の云う通りにはならないで「一体何と思つて居らっしゃるんだか。此んなに家の富榮えるのも元はと云えば私が智慧をつけたからじゃありませんか」と折々大事を云い出してはおびやかすので自分の子ながらもてあまして居た。或る時自分で男を見つけて「あの人ならば」と云つたのでとにかく心まかせにした方がと云つて人にたのんで橋をかけてもらい世を渡る事が下手でない賢だと大変よろこび契約の盃事まですんでから此の男の耳

の根にある見えるか見えないかほどのきずを見つけていやがり和哥山の祖母の所へ逃げて行くと家にも置かれないので或る屋敷の腰元にやった。そうするとともからいたずらもので奥様の手前もはばからないう且那樣にじょうだんしかけいともなく我物にしてしまった。けれ共奥方は武士の娘なので世に例のある事だからと知らぬ振して過ぎて居た。それだのに小吟はいいきになってやめないので家も乱れるほどになったので事をへだてぬ夫婦の間の事だからおいさめになると且那も今までの事はほんとうに悪かったとさとしてそれからもう心を堅くおきめになったので小吟は奥様を大變にうらんで或る夜、且那が御番での留守を見はからつてねて居らつしやるまくらもとに立つて奥様の御守刀で心臓を刺し通したので大變驚き「汝逃すものか」と長刀の鞘をはずして広庭までおつて居らつしやつたけれ共前からぬけ道を作つて置いて行方知れずになつてしまった。色々体をとりのおしとりなおしなさつたけれ共何分重傷なもので「あの小吟を討ち取れ討ち取れ」と二声三声ようやく開いた目よりも細くおつしやるともう御命は無くなつて居た。お次にねて居た女達は事がすんでから起きて「マアマア是は何と云う」と云つて歎いてもどうしようもないので小吟の逃げたあとを人をおつかけさせたけれ共女ながらも上手ににげてどうしてもその行方がわからない。人々は「女ながら中々上手に逃げたものだ」と云い

あつて居た。そしてどうもしようがないので小吟のみつかるまではとその親達を牢屋に入れてつらい目に合わせて居た。けれ共どうしても目つからないと云うので霜月の十八日に殺されるときまったのでその親達をあずかつた役人が可哀そうに思つて「ほんとうに御氣の毒な、子供のためにそんなうきめをお見になるんだもの、もうしかたがないから死ぬ時の事も覺悟して又の世をおねがいなさるほかないわナ」と云つて夜中、酒をすすめたので此の親仁は大變に元氣よく一寸もなげく様子がない。役人が云うには「ほかにもつみがあつて命をとられるものがあるのに」と云つて「自分のつみは云わないで歎くものが多いのに貴方はよくお歎になりますネ。貴方は子のかわりのこんなつらい事にあうのではないか」といえばこの親仁は彼の出家を殺した因果話をして七年目になつて月日もあしたと同じである。そのためだろうと覺悟して觀念した様子は悪人は悪いとは云いながらとみんなの人がその志を可哀そうに思つた。

もうどうしても逃る事が出来ないのだからと云つて首を討つた翌日親の様子をきいてかくれて居た身をあらわして出て来たのをそのままつかまつてこの女も討れてしまった。どうせ一度はさがされて見つけ出されるものを、「お前が早く出れば何の事もなくて助る事の出来る親を自分が出ない許つかりに親を殺してしまつてほんとうにこれまでためしのな

い親不孝の女だ」とにかくないものはなかった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

元禄時代小説第一巻「本朝二十不孝」ぬきほ（言文一致訳）

井原西鶴

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 宮本百合子訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>